様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月　 ６ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０８６４

研究課題名（和文）ワイマル期からナチ期におけるドイツ・シオニズムの動向に関する研究

研究課題名（英文）The Study on the Trends of the German Zionism from 1919 to 1938

研究代表者
長田　浩彰（Nagata, Hiroaki）

広島大学・総合科学研究科・教授

研究者番号：４０２２８０２８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、「シオニスト連合」とそれに対抗する「ユダヤ民族党」(ワイマル期)や「国家シオニスト組織」(ナチ期)という図式で、1919年から38年のドイツ・シオニズムの動向を、後２組織を率いたゲオルグ・カレスキーの思想や行動を分析することで解明した。
　彼は、ワイマル期には、「ユダヤ民族党」の活動でドイツ国内でのユダヤ人の文化・社会的自治の強化を図った。ナチ期の彼は、一転して「国家シオニスト組織」によって、ドイツ・ユダヤ人社会の解体を自発的に主張したが、それは単なる転向ではなく、その事で長期間の解体過程とその間のユダヤ人のドイツでの民族自治をナチ政権から引き出すための手段であったことがわかった。

研究成果の概要（英文）：This study gives light on a trend of the German Zionism from 1919 to 1938 under the diagram of oppositional relations of the "Juedische Volkspartei" (the Weimar period) and the "Staatszionistische Organisation" (the Nazi period) against the "Zionistische Vereinigung", by analyzing the thought and actions of Georg Kareski who led former 2 organizations.
He in the Weimar period, tried to strengthen Jewish cultural and social autonomy in Germany through the activities of the "Juedische Volkspartei". By a sudden turn, he of the Nazi period insisted in the "Staatszionistische Organisation" voluntarily on the liquidation of the German Jewish society shortly before the promulgation of the Nuremberg Laws, but it should not be understood that it was merely the change of his mind, but that it was his means to let the Nazi-government understand the needs of its long-term liquidation process and Jewish autonomy meantime in Nazi-Germany.

研究分野：人文学、史学、ヨーロッパ史・アメリカ史

キーワード：現代史　ドイツ・シオニズム　ワイマル期　ナチ期　ゲオルグ・カレスキー　ドイツ・シオニスト連合　ユダヤ民族党　国家シオニスト組織

１．研究開始当初の背景

研究代表者は研究開始までに、拙稿「ドイツ・シオニスト連合の成立―第二帝制期ドイツのユダヤ人の一側面―」『史学研究』184 (1989 年)、pp. 39-61、同「1912 年のドイツ『ユダヤ人問題』」『西洋史学報』17 (1990 年)、pp. 36-56、同「第一次世界大戦期のドイツ・ユダヤ人の動向」『地域文化研究』17 (1992 年)、pp. 91-120 を通じて、19 世紀末から第一次大戦末までのドイツにおけるシオニスト運動の変遷を跡づけてきた。それらの結論は、次の通りである。

まず、「シオニスト連合」を 1897 年に設立したドイツ・シオニスト第一世代は、自らがパレスチナに移住することを念頭に置かず、ロシアでのポグロムによって難民化しドイツに流入する東欧ユダヤ人の避難地として、「公的―法的に保障された郷土」を設立するというバーゼル綱領の精神をドイツ在住のユダヤ人に広めることを活動目標とした。そうすることによって彼らは、それまでの同化を経て法的解放をめざす過程で、もっぱら否定的に捉えてきた自身のユダヤ人としての部分を、肯定的に再評価して自尊心を回復し、反セム主義に対抗することで、ドイツ国民である自身の地位を保持していこうとした。

しかし、反セム主義やドイツ・ナショナリズムが高揚する 1912 年のドイツにおいて、ユダヤ人同化の可能性を否定する経済学者ゾンバルトやユダヤ人作家ゴルトシュタインの主張にも鼓舞された若いシオニストたち(第二世代)は、パレスチナ移住を人生設計に組み込むことをメンバーに求めるよう決議した。彼らは第一世代とは異なり、ドイツ文化に同化した家庭で育ち、ユダヤ的伝統にも通じておらず、ドイツ人を自任する中で反セム主義に直面し、自身のユダヤ・アイデンティティをシオニズムに求めた世代であった。彼らの動きが、ドイツ・ユダヤ人主流派で同化肯定派の「中央協会」を刺激し、13 年に両者は決裂に至った。第一次大戦中は、「城内平和」政策のもと、両者は協力してドイツの国益に沿った活動を展開するが、反セム主義は収まらず、対抗策で両者は見解を異にした。「中央協会」は、従来通り個人としての同権実現を追求するのに対し、「シオニスト連合」は、ドイツ国内でユダヤ人が１つの「公的―法的な機関」として認知されることで民族的自治を目指す方向でまとまり、反セム主義への対抗を試みるというのであった。

さて、ワイマル期のドイツ・シオニストの動向に関しては、包括的な研究がまだない状況だった。Stephen Poppel, Zionism in Germany 1897-1933, Philadelphia 1977.も、ワイマル期に関してその紙幅を十分には割いていなかった。

２．研究の目的

本研究は、「シオニスト連合」と以下に述べる「ユダヤ民族党」「国家シオニスト組織」の対抗という図式で、1919 年から 38 年の間のドイツ・シオニズムの動向を、特に反主流派のゲオルグ・カレスキーの思想や行動を分析することで解明することをその目的とする。17 年のバルフォア宣言を経て、ユダヤ人国家建設の可能性が現実味を帯びる中、「シオニスト連合」もワイマル期には、パレスチナでの国家建設への支援に活動の重点を置いた。「シオニスト連合」指導層のこういった活動路線に対して、この組織内部の一般メンバーから異議申し立てが始まった。

それは、1919 年にベルリンで設立されケルンやミュンヘンその他にも広がった「ユダヤ民族党」(Jüdische Volkspartei)である。これは、ドイツ内政に進出するのではなく、ユダヤ・ゲマインデ代表者会議選挙に代表を送り、ゲマインデの性格を教団的なものから民族自治的組織に変革していくことを目指した。具体的には、ユダヤ民族の伝統保持・宗教教育の拡大・ゲマインデ脱退や混合婚、背教傾向の阻止・ユダヤ人団結の強化・東欧ユダヤ人差別への反対と並んで、パレスチナでの民族的郷土建設への関与をも、その活動目標とした。つまり、「シオニスト連合」指導層がパレスチナに特化した活動を行うのに対して、「ユダヤ民族党」は、離散の地でのユダヤ人の民族的存続を模索する点で、シオニスト第一世代の活動路線を踏襲するものだったのではないか、と研究代表者は想定した。この点をまず解明することとした。

「ユダヤ民族党」は、1926 年にはベルリン・ユダヤ・ゲマインデ代表者会議で与党となり、29 年にはこの組織の設立者の１人であるゲオルグ・カレスキーが幹部会議長の座についた。彼はナチ期には「シオニスト連合」から除名され、34 年には「シオニスト連合」をマルクス主義者と弾劾し、それに代わってナチ政権から全面的な支持を得てドイツ・ユダヤ人の無理なきパレスチナ移住を実現しようと「国家シオニスト組織」(Staatszionistische Organisation)を設立した。パレスチナ移住を活動の中心に置くことでユダヤ人国家建設支援に舵を切ったのか、つまり、ナチ体制下のカレスキーに思想的転換があったのかに関して、本研究では次に検討することとした。

これらを分析することで、「シオニスト世界機構」やそれから分離して 1935 年にウラジーミル・ジャボティンスキーが設立した「新シオニスト機構」といった国際的シオニスト運動とも異なるドイツ・シオニズムの特徴を明確にできる、と研究代表者は考えたのである。

３．研究の方法

研究テーマに関する資史料の収集については、ドイツ連邦共和国とイスラエル国にある図書館や文書館を訪問し、備品費で購入したデジタルカメラで撮影し、同じく備品費で購入したパーソナルコンピュータに取り込

んでいった。
　ドイツ連邦共和国内では、研究代表者は、ケルン市のゲルマニア・ユダイカやベルリン工科大学反セム主義研究所、そしてハンブルク大学現代史研究所のオーラル・ヒストリー文書館である「記憶の工房」を訪問した。ゲルマニア・ユダイカは、近代以降のドイツ語圏におけるユダヤ史の文献を収集するドイツ最大の専門図書館である。この図書館の重点的収集分野の１つが、「シオニズムとイスラエル」であり、ここを研究代表者は、平成 25 年度と 26 年度に計２度訪れ、ワイマル期からナチ期におけるシオニズム関係の活字史料を数多く収集し、最新の研究動向について調査した。同様の史料調査と収集を、平成 25 年度に研究代表者は、ベルリン工科大学反セム主義研究所でも行った。さらに平成 27 年度に研究代表者は、ドイツからパレスチナにナチ期に脱出したユダヤ人に関するビデオ・インタビューを 2010 年に収集したハンブルク大学現代史研究所「記憶の工房」を訪れて、その中の調味深い３編のインタビューを視聴しメモを取った。
　イスラエル国エルサレム市において研究代表者は、本研究が主な分析対象とするドイツ・シオニストのゲオルグ・カレスキーに関する未公刊史料の調査と収集を行った。平成 25 年度に訪れたユダヤ民族史中央文書館には、本人が死去した後に妻によって委託された書簡や遺稿集があり、研究代表者はその中の重要な史料をデジタルカメラで撮影することで収集した。平成 26 年度に計画し、政情不安のため 27 年度に延期した２度目の現地調査では、研究代表者は同市のシオニスト中央文書館とヤド・バシェム文書館を訪れ、カレスキー関係の証言録やシオニスト組織の内部史料に関して、デジタルカメラで撮影することで収集した。
　シオニズム関係の新聞や機関誌などの定期刊行物については、一部はゲルマニア・ユダイカで収集できたが、特に重要なベルリン・ユダヤ・ゲマインデの月報等は、レオ・ベック研究所ニューヨーク図書館やフランクフルト大学図書館のデジタル・アーカイブで発見することが出来、それらからインターネットを経由して利用した。
　以上のような形で収集した資史料や備品費で購入した関係図書を利用して分析を進め、その成果について研究代表者は、３度の研究発表と２編の雑誌論文(後述)の執筆により公表した。

４．研究成果
　ゲオルグ・カレスキーは、ワイマル期からナチ期のベルリン・ユダヤ人社会の著名人の１人である。彼は、実業家、銀行家、ベルリン・ユダヤ・ゲマインデ幹部会のメンバーであり、1929 年から 31 年までその幹部会議長も務めたシオニストであった。ドイツ・ユダヤ人人口の 3 分の 1 程になる 17 万人前後の人口を有したベルリン・ユダヤ人社会の頂点にも立った実力者である反面、彼には敵も多かったのであろう。ナチ期において彼は、1937 年秋にパレスチナに渡るまで、「ドイツ・シオニスト連合（以下「シオニスト連合」)」に競合・敵対する修正主義シオニスト（現地のアラブ系住民に妥協せずにユダヤ人の絶対的優位を国家設立によって目指す人々）を糾合する「国家シオニスト組織」を率い、ナチ政権からの支持を得て、ドイツ・ユダヤ人社会の解体と彼らのパレスチナへの移住を実現しようとし、またそれによりドイツ・ユダヤ人社会での指導的地位を確保しようとした。この事でカレスキーは、同時代人からも「ヨーロッパ世界のクイスリング［＝対ナチ協力者］」、「ナチのスパイ」といった否定的評価を与えられもした。
　後世の歴史家も、レヴィーネからコハーヴィや最近のニコシアまで、カレスキーのナチ政権下での活動にその関心を集中させてきた。しかし彼は、ワイマル期には全く別の顔を見せていた。上述の「シオニスト連合」が、バルフォア宣言(1917)以降、パレスチナでのユダヤ人の郷土建設という実践的方向にその活動を収斂させていく中で、同組織のメンバーでもあったカレスキーは、別の路線を追求した。彼は、その他のメンバーと共に、ベルリンで「ユダヤ民族党」を組織してゲマインデ代表者会議選挙に参入し、ゲマインデの性格を「民族ゲマインデ」に改編するよう主張して、ディアスポラ（世界離散）でのユダヤ人の文化的・社会的自治を拡充しようとした。つまり彼らは、パレスチナ移住を主たる目標としてはいなかったわけである。従来のカレスキー研究では、この点への関心は薄かった。
　本研究においてより精緻に解明したのは、まず「シオニスト連合」が、1918 年末から 21 年にかけて、ドイツのユダヤ・ゲマインデの性格を「民族ゲマインデ」に改編していく方向での活動をリードし、その過程で「ユダヤ民族党」の成立と拡大を支援していたことや、21 年 5 月のパレスチナでのアラブ人反乱によって、その活動をドイツ国内よりもパレスチナに向ける方向に変化させることで、ゲマインデ政策への関心を消失させていったことであった。これが本研究の第１点目の成果である（５．主な発表論文等を参照)。
　論点をカレスキー個人に戻そう。それでは、カレスキーは、ナチ政権の成立でその目指す方向を、それまでのディアスポラでのユダヤ人の文化的・社会的自治追求から 180 度転換して修正主義シオニストになった、と単純に理解していいのだろうか。言い換えれば、彼にとって修正主義シオニズムは何を意味したのか。この点を追跡し分析したことが、本研究の第 2 点目の、そして主要な成果である。
　カレスキーがナチ期にその指導者に収まった「国家シオニスト組織」は、せいぜいの所メンバー数 1,000 名程度の小組織に終わっ

た。しかしこれによってカレスキーは、今までのゲマインデ選挙のための「ユダヤ民族党」にはなかった機関誌という意見発表の場を得ることとなった。『国家シオニスト』がそれである。ここで彼は、「ドイツ・ユダヤ人社会の解体―破産か強制的和解か」と題する論説を 1935 年３月 31 日に発表した。ドイツ・ユダヤ人がニュルンベルク法(35/9/15)によって公民権を剥奪された国籍所有者に貶められる半年前の段階で、自ら進んでドイツでの生活を止めパレスチナへと移っていこうという主張が、ここで展開された。彼は、ドイツ・ユダヤ人社会が政権発足から２年間で急速に縮小している現状を踏まえた上で、ナチ政権の意向をある意味先取りする形で論を展開した点が重要である。また一方で彼が、20 年から 30 年というドイツ・ユダヤ人社会の長期間の解体過程を設定し、その間にユダヤ人がナチ・ドイツ下で置かれた現状を改善するよう、政権に対して要求していたことも見逃されてはならない。では解体までのドイツ・ユダヤ社会で、彼が何を望んでいたのかをもう１つの史料に窺ってみよう。

それは、ナチ政権が、ニュルンベルク法についてドイツ・ユダヤ人に意見を聞いた恐らく唯一の資料である。つまり、ゲッベルスが創刊しドイツ労働戦線の機関誌となった『攻撃』が、1935 年 12 月 23 日号に載せたカレスキーへのインタビュー記事がそれである。ここで彼は、法の条文自体への言及は避け、ニュルンベルク法によって実現したドイツ人とユダヤ人の文化生活における分離を肯定的に評価している。それは、この分離によって、ユダヤ人学校で子どもたちに集中的にユダヤ人教育が行われる基礎が確立し、当時進んでいたユダヤ人文化同盟連合の設立によって、ユダヤ人芸術家が組織的に統合され、彼らが創作したユダヤ人の感情にふさわしい作品が、ユダヤ劇場で上演されるといった点であった。また法を通じた混合婚の禁止によって、ユダヤ人国家を創設するために必要な宗教と家族が保持されることも、彼の肯定的評価の対象となっていた。こういったことから、本研究では、カレスキーが、「ユダヤ民族党」を通じてまさにワイマル期に求めていた「民族ゲマインデ」を、実はナチ期のこのユダヤ人社会の解体過程で目指していた、と理解することが出来ると結論づけた。つまり、彼の修正主義シオニズムはそのための手段であったという解釈が、本研究での主要な成果である（これに関しては、現在論文を投稿中である）。

1922 年のパレスチナの人口分布を見れば、ムスリムが 59 万人だったのに対して、ユダヤ人は８万４千人だった。31 年までに更に移住したユダヤ人は９万４千人に留まった。一方で、ナチ政権発足後 39 年にかけて中東欧から移住したユダヤ人は 20 万人を超えたという。ナチ政権の迫害を逃れてパレスチナに向かったユダヤ人は、そこでどう過ごしたのか。例えばカレスキーは、37 年秋にパレスチナに向かった後、そのままそこに定住することになった。既に彼より先に定住していたドイツ出身のユダヤ人からナチ期の活動を非難された彼は、名誉回復を求めてそこでラビ法廷に訴えたが、失敗に終わっている。親元を離れてキンダー・トランスポートでイギリスに迎え入れられた独墺のユダヤ人の子どもたちのその後に関しては、木畑和子氏の研究が昨年出版された。パレスチナに渡ったユダヤ人は、必ずしもシオニズムを信奉していたわけではない。カレスキーのその後を糸口として、パレスチナでの彼らのその後に関する研究へと本研究をさらに発展させて行くことも可能である。

〈引用文献〉

Herbert S. Levine, "A Jewish Collaborator in Nazi Germany: The Strange Career of Georg Kareski, 1933-37", in: *Central European History* 8 (1975), S. 251-281.

Yehoyakim Cochavi, "Georg Kareski's Nomination as Head of the Kulturbund: The Gestapo's First Attempt - and Last Failure - to Impose a Jewish Leadership", in: *Leo Baeck Institute Year Book* 34 (1989), S. 227-246.

Francis R. Nicosia, *Zionismus und Antisemitismus im Dritten Reich*, Göttingen 2012, S. 246-273.

木畑和子『ユダヤ人児童の亡命と東ドイツへの帰還―キンダー・トランスポートの群像』ミネルヴァ書房、2015 年、総 348 頁。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１件）

１．長田浩彰，ワイマル期ドイツにおける「ユダヤ民族主義」的動向に関して－同化主義でもシオニズムでもない第三の道，西洋史学報，43 号，査読有，2016，掲載決定済

〔学会発表〕（計　３件）

１．長田浩彰，ゲオルグ・カレスキー(1878-1947)－ナチ政権下ドイツの修正主義シオニスト？，日本ユダヤ学会第 12 回学術大会，2015 年 10 月 31 日，早稲田大学文学学術院（東京都新宿区）

２．長田浩彰，第一次大戦からワイマル期にかけてのドイツ・ユダヤ人－第一次大戦がドイツ・シオニズムにもたらしたもの，シンポジウム：第一次世界大戦とユダヤ人，2015 年１月 31 日，大阪大学中之島センター（大阪府大阪市）

３．長田浩彰，ワイマル期以降のドイツ・シオニズムの動向に関する一考察－ユダヤ民族党(JVP)とゲオルグ・カレスキー(1878-1947)，平成 26 年度九州史学会西洋史

部会，2014 年 12 月 14 日，九州大学大学院
人文科学研究院（福岡県福岡市）

６．研究組織
(1)研究代表者
長田　浩彰　（HIROAKI　NAGATA）
広島大学大学院総合科学研究科・教授
研究者番号：４０２２８０２８